

タイ語と日本語の時の表現の対照

Expressions of Time in Thai and Japanese: A Contrastive Study

峰岸真琴

Abstract

Contrastive linguistics tends to base language comparison on the grammar of a de facto standard language, such as classical Latin in the past, or English in the modern age. Typological linguistics may hold promise for providing language-neutral standards but, for now, still seems to reflect a Eurocentric view in its inability to properly handle isolating languages with few morphological clues for comparison.

This paper proposes a multilayered analytic method for comparing languages, which expresses linguistic form and meaning in respective dimensions. One dimension consists of vertically stacked layers denoting phonemic, morphological, and syntactic layers, each of which may be further divided into sub-layers if required by some language-specific properties. The other dimension, at the bottom of the layers, consists of successive phases denoting a form's meaning in the above layers in their order of appearance.

In order to assess the validity of the method, we applied it to the comparison of expressions of time. An expression of time in Thai is divided into six layers, i.e., (1) topic, (2) auxiliary, (3) simplex and compound verb (V1-V2), (4) serial verb (V1+V2), (5) directive verb, and (6) final particle layer. Each form in the above layers respectively denotes the phase (1) temporal scene-setting, (2) ingressive, progressive, but not terminative, (3) lexical verbal aspect, (4) activity plus resultative, or terminative, (5) lapse of time with deictic respective or prospective meaning, and (6) cognition of a change.

Similarly, an expression of a time in Japanese is also divided into six layers, i.e., (1) topic, (2) simplex verb, (3) compound verb (V1-V2), (4) gerundive (post-verb, i.e., te-form), (5) auxiliary, and (6) nominal. Each form in the above layers, respectively, denotes the phase (1) temporal scene-setting, (2) lexical verbal aspect, (3) activity and ingressive, progressive, and terminative, (4) lapse of time with deictic prospective or respective meaning, (5) cognition of a change, and (6) conceptualizing the time of the whole event.

The multilayered analytic method clearly shows the iconicity between time and the order of each layer's phases. First, we set aside the phase denoting the lexical verbal aspect, since its meaning is determined by the forms in the other layers. Thereafter, the order of the meaning of the remaining phases is identical: (1) the temporal scene, (2) ingressive and progressive aspect, (3) resultative or terminative aspect, (4) lapse of time with deictic meaning, and (5) cognition of a change.

Thus, the comparison of the results unveils the striking similarity of two extreme language types, isolating Thai with SVO order and agglutinative Japanese with SOV order, which shows the validity of the multilayered method.

Keywords

タイ語、日本語、時の表現、複線条性、複層分析記述法

Thai, Japanese, time expression, polylinearity, multi-layer analysis

1. はじめに

二言語の対照研究には、比較の客観的な基準や方法論が存在しない。このため両言語の

表面的に似ている特徴を探しては、全体の体系性を考えずに場当たりに比較することになりがちである。特に、タイ語や中国語などの孤立語タイプの言語には、ヨーロッパ的な観点から「普遍的」と見なされがちな格表示や動詞の形態法による文法カテゴリーがない。また、これらの孤立語と膠着語である日本語を対照する際には、日本語に存在する文法概念が、孤立語でどのように表現されるのかという、一方的な視点からの研究になる危険が伴う。言語記述・分析、対照、さらには外国語教育の面において有意義な研究を行うためには、この対照研究の方法論上の非中立性を解消することが望ましい。

本稿の目的は、第一に、機能主義的な観点に基づいた分析枠組みとして、加藤(2006)の提唱する複線条性(polylinearity)の原理を応用した「複層分析記述法」を提案することであり、第二に、タイ語と日本語の具体的な分析記述を通じて、この分析記述法の方法論としての有効性を検証することである⁽¹⁾。1.1節で述べるように、複層分析とは、時間軸上に展開する言語表現を、音声・音韻、形態・統語、意味などの「層:layer」ごとの時間軸上の展開として分析し、総合的に記述する方法である⁽²⁾。

タイ語と日本語の「時の表現」に関する対照研究を、複層分析記述法を用いて行う具体的な方法は、次のようなものである。まずそれぞれの言語の「時の表現」を複層状に分析・記述する。その上で、「時の表現」の形式と意味・機能の相違点および共通点を比較対照する。「時の表現」の分析の対象としては、動詞を中心とした述部に付加される「アスペクト」「時制:Tense」に加え⁽³⁾、主題として現れる時間名詞句や、日本語の述部末尾に現れる体言類の一部も含まれる。

上記の2つの目的を達成するためには、両言語の分析結果の検証によって方法論を見直すことが重要である。しかし、分析の対象が両言語の主題から叙述の全体に及ぶため、個別の形式に関して、従来の研究を踏まえての詳細な分析を行う準備ができていない。そのため本稿では、十分な検証を経ていない主張は「仮説」と明記して議論を進めることにする。一連の仮説は暫定的なものであって、今後の検証によって修正すべきものである。

第一の仮説は、客観世界の事象と、それに対する人間の主観的認識に関するものである。

時の表現を総合的に分析するために、本稿では「出来事:happening」と「局面:phase」という概念を導入する。出来事とその局面は、人間の認識上の問題である。出来事は、一つ以

(1) 本稿は、国際日本研究センター対照日本語部門主催『外国語と日本語との対照言語学的研究』第34回研究会での研究発表「タイ語と日本語のアスペクト対照の試み」(2021年12月18日)の資料に大幅な修正を加えたものである。

(2) 本稿でいう「層(layer)」は、廣瀬他(編)(2022)の提唱する「言語使用の三層モデル」でいう「層(tier)」とは提案の目的も内容も異なる。そこで両者を区別するため、本稿でいう「層」を、必要に応じて「レイヤー」と表記することにする。

(3) 厳密に言えば、ヨーロッパ諸言語の伝統文法で言う「述語動詞の文法範疇、即ち「時制:Tense」「相:Aspect」「法:Mood」は、日本語(膠着語)あるいはタイ語(孤立語)の述語を構成する形式の分析に、そのまま当てはめることはできない。そのため、それぞれの概念を拡張した「テンポラリティー:Temporality」、「アスペクチュアリティー:Aspectuality」、「モダリティー:Modality」という呼び方もあるが、本稿では便宜的に伝統的な呼称を用いる。

上の「局面:phase」からなる。出来事のうち、その内部に変化が認識されない「状態:state」を、最小の局面であると定義する⁽⁴⁾。この定義から、次の認識論上の仮説が導かれる。

【仮説1】一般に出来事は「変化:change of state」の過程を内包する。この変化の過程の認識は、変化の前と変化の後との2つの局面の差分の認識である。

1.1 複線条性の原理と複層分析記述法の提案

複線条性の原理とは、ソシユールのいう時間軸上に不可逆的に進行する言語記号の線条性を、単層的なものではなく、音声・音韻、形態、統語、意味などの複層列からなると考えるものである。言語の現実の運用の観点から見れば、話し手の発話と聞き手の解釈の両面において、音声から意味に至る各層の処理が、時間軸に沿って同時並行的に進行していることは自明である。従って、複線条性は言語の普遍的原理の一つである。

複層分析記述法は、記述対象言語の言語形式の音韻、形態統語、意味的な表現形式のレベルを縦方向(y軸方向)に積み上げた「層」の重なりとして表し、それぞれの層に出現する形式を、不可逆的に進行する時間上の「局面」として横方向(x軸方向)に表す、二次元的な記述法である。複層分析記述法は、言語の表現面の複層性および時間的不可逆性を基盤にする点で、西洋音楽の楽譜に例えられる。

この分析記述法を用いるにあたって、言語事実の記述と、それに対する解釈を可能な限り分離するために、例えば以下のような分析・記述上の制約を提案する。

1. 時間的不可逆性は、話し手の発話および聞き手の解釈という、言語運用の両面における基本的原理である。従って、言語の分析・記述もまた、この基本的原理の制約を受ける。具体的には、言語表現の各レベルにおいて、時間の展開に逆行するような、「主題化、左方転位」などの言語形式の「移動」という分析は、あくまで事実の解釈の便宜的な表現であると見なす。言語事実の記述として許容されるのは、「ある形式が現れる環境が複数存在すること」までである。
2. ある位置にあるべき形式が「省略」されているというのもまた、便宜的な解釈の表現である。言語事実の記述として許容されるのは、「ある位置に何者かが存在しない」というギャップ(gap)までである。このギャップに欠落した情報内容がどのように埋められるかは、先行文脈も含め、ギャップが出現する前後の各層の局面の情報から得られるべきものである。動詞の屈折パラダイムにおけるゼロ形態素のような「有限個数の形式の排他的対立」による場合を例外として、「音形を持たないゼロ形式が

(4) 本研究の「出来事:happening」は、“what happens to you”という表現に見るように、客観的事象ではなく、人の主観に立ち現れる「誰かにとって起こるもの」という認識経験上の概念である。その意味で Talmy (1991) が統語上、single clause に対応すると定義した「event」とは異なる。Talmyによれば、simplex event はそれ以上分解できないが、何が single clause かは言語によって異なる。一方、出来事は差異が認識可能である限り、無限に分解可能である。客観的事象と主観的出来事との違いについては、峰岸(印刷中)を参照されたい。

存在する」という表現は、あくまで言語学的なひとつの「解釈」の表現に過ぎない。

1.2 複層分析記述法を用いた言語間の対照研究

「時の表現」に関わるタイ語の述部は、助動詞、動詞(複合動詞を含む)、動詞連続(方向動詞を含む)、終助詞の層に分割できる。同様に日本語の述部は、動詞(複合動詞を含む)、補助動詞、助動詞(動詞接辞を含む)、形式名詞類の層に分割できる。ただしタイ語と日本語は互いに異なる言語体系であるから、両言語の形式のそれぞれが完全に対応するわけではない。例えばタイ語の動詞連続「V1 + (N) + V2」の後項動詞V2と、日本語の「V1してV2する」の補助動詞V2とは完全には対応しない。しかし時の表現に関しては、両者の一部に共通する特徴が認められるため、比較の対象として取りあげる。

2. 通言語的なテンス・アスペクト定義の検討

「時の表現」に関する研究は、タイ語については西洋語のテンス・アスペクトの研究との比較を念頭に行われてきた。一方日本語については、国語学、言語学、日本語教育学などの各分野において、さまざまな用語・定義が提案されてきた。しかし各分野の研究史、背景、方法論が異なるために、用語法の混乱が生じている。そこで本稿では、タイ語と日本語の時の表現の分析の出発点として、通言語的に広く受け入れられている Comrie(1976)のアスペクトおよびテンスの定義について検討する⁽⁵⁾。

2.1 Comrie(1976)のテンス・アスペクトの基本概念

Comrie(1976)は、テンスおよびアスペクトを以下のように定義している。

テンス(tense)の定義

Tense relates the time of the situation referred to to some other time, usually to the moment of speaking. (Comrie [1976:1-2])

Since tense locates the time of a situation relative to the situation of the utterance, we may describe tense as deictic. (*ibid.*:2)

アスペクト(aspect)の定義

Aspects are different ways of viewing the internal temporal constituency of a situation. (*ibid.*:3)

この定義において留意すべき第一点は、テンスとアスペクトの違いとして、テンスが通

(5) 私見では、Comrie(1976)の分析対象にはアジアの諸言語が少ない(中国語、ビルマ語に言及がある)ため、東南アジアや東アジアの諸言語の完結相の考え方には再考の余地がある。中沢(1980)は、スラブ語研究の立場から Comrie(1976)を批判的に検討しているが、テンス・アスペクトの一般言語学的な研究として、同書が今もなお標準的な意味を占めていることに変わりはない。

例発話時点と結びつけられる「直示的:deictic」な概念であるのに対し、アスペクトは直示性とは無関係の、ある状況の内部の時間的構成についての異なる見方である点である。なお、Comrie(同書p.13)のいう「状況:situation」とは、静的な「状態:state」、外側から見た動的な「出来事:event」、内側から見た変化に着目した「過程:process」の三者の総称である。

第二点は、「状況の見方の違い」が、アスペクトの定義に反映する点である。「外側から見た」は「完結相:perfective」に対応し、「内側から見た」は「不完結相:imperfective」に対応する。つまり、次に見る「完結相」は状況を「出来事」として捉え、「不完結相」は状況を「変化する過程」として捉える見方である。

完結相(perfective)と不完結相(imperfective)の違い

[...]the **perfective** looks at the situation from outside, without necessarily distinguishing any of the internal structure of the situation, whereas the imperfective looks at the situation from inside, and as such is crucially concerned with the internal structure of the situation, [...] (*ibid.*4) [強調は引用者による]

この「完結相:perfective aspect」としばしば混同される術語に「完了相:perfect aspect」がある。

完了相(perfect)の定義

One way in which the **perfect** differs from the other aspects that we have examined is that it expresses a relation between two time-points, on the one hand the time of the state resulting from a prior situation, and on the other the time of that prior situation. (*ibid.*52) [強調は引用者による]

上記のように、完了相は2つの時点、即ち先行する状況に起因する結果状態の時点と、それに先行する状況の時点との関係を表現するものである。完了相に対立する概念は、状況の一時点のみに焦点を置く「非完了相: non-perfect」である。Comrie(同書p.52)は英語の完了相の例として、“I have lost (Perfect) my penknife”(現在完了形)を、非完了相の例に過去時制の“I lost (non-Perfect) my penknife”を挙げている。

2.2 Comrie(1976)の定義について留意すべき点

Comrie(1976)のテンス・アスペクトの定義に加えて、本研究の分析との関連から注目すべき点を以下に挙げる。

第一に、アスペクトの研究では、それぞれの言語研究における伝統的な文法用語と、その形式の持つ一般言語学上の意味概念とが一致しないことがある。Comrie(1976)は、個別言語の伝統的な文法用語は‘Perfect/non-Perfect’のように、語頭を大文字で記し、通言語的な

文法概念は‘perfect (meaning)’のように小文字で記すことで、両者を表記上区別している。本稿では形式上の Perfect を「完了形: Perfect form」のように「形」をつけて呼び、通言語的概念としての perfect を「完了相: perfect aspect」のように「相」をつけて呼んで区別することにする。

第二に、完結相を「全体性」として理解すべき点である。Comrie(同書 p.18)は、完結相はその内的な過程として「開始、中間、終了」を含む場合であっても、開始から終了までの「完成した状況: a complete situation」を意味する、「一つの全体」として見るべきであって、状況の「終了」に強調を置くべきではないと述べている⁽⁶⁾。

Comrie(1976)より以前から、日本語のテンス・アスペクトの研究には長い歴史があり、また同書の定義が広く受け入れられて以降も、当然ながら同書の定義に基づかない研究も数多く存在する。それらの中には、「完了」という言葉の日常的な意味に引きつけられて、完了相あるいは完結相を「出来事や過程が終わっている」と考えているらしい議論も散見される。そもそも日本語研究の分野では、文法概念や用語の定義を明確化しないままに「完了、パーフェクト(ペルフェクト)、完成」などの用語を用いて議論しているものも見受けられる。このことが、テンス・アスペクト研究の議論をいたずらに錯綜したものになっている面もある。特に完結相はアスペクトであり、発話時点の直示性とは無関係な「状況の見方」であることは、タイ語の完結相の *leew* や日本語の「た」の意味を論じる際にも注意を要する。

3. タイ語と日本語の類型的特徴

タイ語と日本語それぞれの時の表現の分析に入る前に、両言語の言語類型上の特徴を表1に挙げる。

表1: タイ語と日本語の言語類型上の比較

類型特徴	タイ語	日本語
語形態	孤立語 (語形変化なし)	膠着語 (格助詞、助動詞類が膠着する)
基本語順	SVO (主語+動詞+目的語) の VO 型	SOV (主語+目的語+動詞) の OV 型
修飾関係	NA (名詞+形容詞)、助動詞+動詞	AN (形容詞+名詞)、動詞+助動詞
倒置詞	前置詞+名詞	名詞+後置詞 (格助詞など)

上記の諸特徴について両言語は対称的な言語であるが、以下のような共通点もある。

主題卓立性

言語とも、文頭に主語、目的語、時間詞などの主題が置かれ、叙述がそれに続く。

(6) "perfective aspect"に関する和訳語には「完成相」などがあるが、一般に「変化」を含意する「成」よりも、まとまりを意味する「結」の方が、次の「完了相: perfect」との違いを際立たせると考え、本稿では「完結相」の訳を採用した。

情報構造

情報構造上の「焦点」は、タイ語では動詞句より後に、日本語では動詞句の前に置かれる⁽⁷⁾。

なお、孤立語であるタイ語には、動詞の文法カテゴリーとしてのテンスはない。一方、日本語に文法カテゴリーとしてのテンスが存在するか否かには、従来さまざまな議論がある。当然のこのようだが、両言語に直説法、仮定法、接続法などの「叙法:Mood」も存在しない。一つの言語体系の記述という観点からは、むしろ文法カテゴリーとしてのテンス・アスペクト・モダリティーの別がないものとして、一から検討し直すべきであろう。

タイ語、日本語の具体的な比較対照の前に、比較に用いる際の文法用語の便宜的呼称について述べておく。

両言語の文法体系は対称的といえるほど異なるため、文法用語も互いに異なっている。そこで両言語を比較するには、日本語で伝統的に通用している文法用語を便宜的に示し、必要に応じて両言語の文法記述で用いられている用語(日本語あるいは英語)を補足・説明する〔例:日本語の「助動詞る・た」(動詞屈折接尾辞)〕。タイ語にあって、日本語にない文法概念は、日本語の文法用語を英訳語とともに示す。

なお丸カッコ(X)は、形式Xの有無が選択可能であること、[X|Y]はXあるいはYのどちらか一方の選択が義務的であることを表す。また参考文献中のタイ語は本稿の音韻表記に統一して引用する。タイ語の5つの声調(中平 *maa*, 低平 *màa*, 下降 *máa*, 高平 *máa*, 上昇 *mǎa*)の表記は、それぞれ音節末の数字(1~5)で代用する。

4. タイ語のアスペクトの概要

4.1 レイヤーと局面とによる分析記述法の導入

仮説1に示したように、我々は、ある出来事が生じることを「局面の相対的な変化」として認識し、それを「時の経過」に置き換えていると考えられる。

表2(次頁)はタイ語の「時の表現」に関連する形態統語上のレイヤー(Tp, Aux, V, F)および各レイヤーに現れる形式類が表す認知・語用論上の時の局面(Phase)を、複層分析記述法によって表したものである。

表2において、動詞(複合動詞を含む)以外の形式の出現は、叙述において義務的ではない。表2では、否定詞など、時の表現に関係しない形式は原則省略するが、V層それぞれの動詞と名詞(N)の位置を明示するため、名詞は例外的に(N)として示してある。左端の第1列の各層の名称は、両言語の比較のための便宜的名称で、カッコ内の文法用語はその略称である。各層の形式には、タイ語文法で用いられる「方向動詞」、「句末助詞」などの用語が記されている。「時の表現」の対照研究の場合、二言語の比較のために、層(レイヤー)を複数のサブ

(7) タイ語の情報構造については、峰岸(2019a, 2019b, 2019c)を参照されたい。

レイヤー(sub-layer)に分割する必要がある。サブレイヤー間を分割する線は破線で示す。層の数は分析の目的に応じて増減する。例えば、上記に音韻層は示されていないが、日本語の疑問文を分析する場合は、「上昇(有標)イントネーション」を明示するための音韻層を追加する。日本語には、タイ語の動詞連続層に相当する層はない。

表2:タイ語の時の表現の複層構造

レイヤー	各形式の相対的出現位置				
主題層 (Tp)	時間詞				
助動詞層 (Aux)	連用詞				句末助詞
単独動詞層 (V)	V		(N)		
複合動詞層 (V1-V2)	V1-V2		(N)		
動詞連続層 (V1+V2)	前項(V1+)		(N)	後項(+V2)	
補助動詞層 (V1+v)	V		(N)	方向動詞(+v)	
終助詞層 (F)					
局面 (P)	P_Tp	P_Aux	P_V1	P_V1+[V2 v]	P_F

表各列の左側の二重縦線「||」は、「主題、助動詞、動詞、終助詞」の相対的な出現位置の左端を示す。例えば主題の時間詞は助動詞よりも前に現れる⁽⁸⁾。助動詞は動詞よりも前に、終助詞は上記全てのレイヤーよりも後に現れる。ある層に新たな言語形式が現れることで、新たな局面Piが導入される。局面Piよりも右の空白のセルは、局面Piの意味のスコープである。Piのスコープは、次の形式の出現により、新たな局面Pi+1が導入されるまでであると仮定する。例えば、主題が出現した場合、そのスコープは文末まで及ぶが、助動詞の意味のスコープは、終助詞の前までである。助動詞とV層のサブレイヤーとが共起する場合は、助動詞の意味のスコープは単独動詞層のV、V1-V2、動詞連続層の前項(V1+)、補助動詞層のVまでであり、複合動詞層の後項(+V2)ならびに補助動詞層の方向動詞(+v)までは及ばない。

一方、二重縦線より左(前)の斜線部分(\)は、当該の層のセル(局面)に、いかなる言語形式も現れないことを示す。最下段の状況の局面(Phase)を表す層は、形式類とは異なる意味的な次元の存在である。本稿では便宜上、各層の形式類の意味を最下層に投影したものを「局面」の層として、それぞれ「局面P_Tp, P_Aux, P_V1, P_V1+[V2|v], P_F」と呼ぶことにする。

4.2 各レイヤーの形式の表す「時の表現」

タイ語の「時の表現」は、表2の各層とその局面ごとに、以下のような特徴がある。

(8) タイ語の主題については、峰岸・ウィッターヤン・パンヤーン(2019)を参照されたい。

主題層:局面 P_Tp

同層に現れる形式は名詞類(時間詞)および名詞句、例えば、「今日、昨日、去年」などの時点を表す名詞や「～以降」などの期間を特定する名詞句である。

【仮説2】主題層の局面 P_Tp は、当該の発話叙述の時間的局面向を設定する場面設定 (scene-setting) の機能を持つ。さらに後続する発話があれば、その発話もまた同じ時間的局面向を継承する。こうして局面 P_Tp は、新たな時間詞の出現によって別の局面が現れるまで継続する。

仮説2 から、次の仮説が導かれる。

【仮説3】主題層の時間詞を欠く発話叙述であって、かつ先行する発話の P_Tp 局面が継続していない場合(例:「太陽は東から昇り、西に沈む」)は、先行文脈の時間的な限定のない、「話し手にとっての現実、すなわち一般論、原理、習慣」を表す叙述である。

助動詞層:局面 P_Aux

同層に現れる形式は、クメール語の文法記述で、坂本(1988)が動詞を前方から限定する形式の総称として「連用詞」と呼んでいる語類である⁽⁹⁾。英語では preverb, preverbal, auxiliary verb などに相当する。連用詞には、拘束形式である助動詞だけでなく、時を表す副詞の一部(例: *diaw5*「もうじき」、*yan1*「まだ、依然として」)も含まれるため、「助動詞・副詞類」の総称と見ることできる。

連用詞のうち、接語 *ca=*「未然:～しようと思う」は、続く叙述内容が「非現実」のものであること、動作であれば「まだ着手されていないこと」を明示するために重要である。助動詞層に現れる形式として、Noss (1964) は以下を挙げている。*chak4* V「Vし始める」、*[kuap2/cuan1/ theep3/ rim1]* (*ca=*) V「今にも、まさに、危うくVするところ」、*kamlaj1* (*ca=*) V「Vしている最中:進行」⁽¹⁰⁾、*[phəŋ3 /phuŋ3]* (*ca=*) V「Vしたばかり:近接」、*mak4* V「しばしばVする」。以上、「未然、将然、進行、近接(直前・直後)」相はあるが、「終了」相がないことに注

(9) 「連用詞」、「連名詞」は、それぞれ動詞、名詞を前から限定する語類で、坂本(1988:8)がクメール語の品詞名として採用したものであるが、タイ語にも通用する。峰岸(2019c)で、便宜的に「とりたて詞」と呼ばれるものは、タイ語の連名詞の一部である。

(10) Iwasaki & Ingkaphirom (2005) も述べているように、タイ語の「進行」を表す *kamlaj1* はクメール語の *kamlaj*「力」の借用である。タイ語の *kamlaj1*「力」はクメール語の名詞化された状態動詞(< *klaj*「強い」+ /-ɔm-/「名詞化接中辞」)を借用したものであるが、クメール語の名詞がどのような文法化プロセスを経てタイ語の連用詞になったかは明らかでない。一方、クメール語では進行相を連用詞 *kompun* (-*tæe*) V「Vしている最中だ」で表す。*kompun* (*ok. kamvoŋ*) は Old Khmer に既に見える固有語である。Long Seam (n.d. p.107) は *kamvoŋ* の意義を “rester, endurer”「留まる、耐える」とし、碑文番号 K728 の例を挙げている。*gi nā ge tel kamvoŋ doŋ ge pitāmatā ge* [traduit. c'est la (dans l'enfer) qu'ils resteront avec leurs pères et leurs mères.] (K728, VIII A.D.1.5)

意されたい。

助動詞層の時の表現の意味は、P_Auxと後続する動詞Vの語義的アスペクトとによって決まると考えられる。例えば、*kamləŋ1*「進行相」は、動作動詞と共起する場合は「進行相」を表すが、状態動詞と共起する場合は、不足でも過剰でもない、ちょうど頃合いの状態であることを表す。例：*dii1*「良い」、*kamləŋ1 dii1*「ちょうど良い頃合いだ」

【仮説4】助動詞層の局面P_Auxは、P_Auxの意味と、後続する動詞Vの語義的アスペクトとによって決まる。P_Auxは「未然」、「将然」、「進行」、「近接(直前・直後)」などの不完結相を意味するが、「終了」相がない。

単独動詞層：局面P_V1

同層に現れる形式は、**他動詞**(あるいは補語名詞(N)を伴う不完全動詞)、または補語(N)を伴わない**自動詞**(完全動詞)である。ただし、タイ語では他動詞・自動詞という分類は、意味・統語の両面から見て有効ではない。目的語(補語)の有無に基づく自他の対立よりも、むしろ人間が意志的に企図・着手する**随意動詞**(voluntary verb)と、そうでない**不随意動詞**(involuntary or spontaneous verb)という分類の方が、動詞の意味分類としては有効である⁽¹¹⁾。以下では、随意動詞を「**する動詞**」、不随意動詞を「**なる動詞**」と呼ぶことにする。単独動詞層には、「する動詞」「なる動詞」ともに現れることができる。

本動詞(および本動詞に共起する副詞その他の統語環境)によって表される「状況」の分類、「達成、活動、限界的(到達)、一回(瞬間)」などは、語彙的アスペクトと呼ばれる。

【仮説5】単独動詞層の局面P_V1は、動詞自体の語義的アスペクトと、P_V1以外の相の局面(例えば主題層の時間詞、動詞連続層の+V2)とによって決まる。

タイ語動詞の語彙的アスペクトについてはPhillips & Thiengburanatham (2007)が、「進行」を表す助動詞*kamləŋ1* (*ca=*) V「Vしている最中」や、「継続」を表す補助動詞*V yuu2* 「Vしている」と共起可能かに基づいて分類を行っている。タイ語の場合、状態を表す動詞も、「進行」の助動詞*kamləŋ1* (*ca=*)や「継続」の補助動詞と共起できる点が興味深い。

これ以外に、動詞それ自体の語義として、*rəəm3*「始める」(起動相:Inchoative/ingressive)や*ləək3*「やめる、中止する」(interruptive)、*khaay1*「慣れている、経験している」など、「時」に関する意味を持つものもある。これらは動詞句を補語に取る動詞である。

複合動詞層：局面P_V1-V2

同層に現れる**複合動詞**(V1-V2)としては、「する動詞」型の複合動詞も「なる動詞」型の複

(11) クメール語およびタイ語の随意・不随意動詞については、峰岸(1986, 2007)を参照されたい。

合動詞も現れることができる。複合動詞はV1とV2とを切り離すことができない。この点で、動詞の間に補語や否定詞を挟むことが可能な**動詞連続**: Serial Verb Construction (V1+V2)とは異なっている。複合動詞の意味は類義動詞の並列構造のものが多いようだが、未調査である。

複合動詞の例には、*duu1-lee1*「注視する、世話をする」< *duu1*「見る」+ *lee1*「見つめる」、*priap2-thiap3*「比較する」< *priap2*「比べる」+ *thiap3*「比べる」、*thiap3-thaw3*「同等の」< *thiap3*「比べる、接近する」+ *thaw3*「同等の、達する」、*cep2-puay2*「痛む、病気になる」< *cep2*「痛む」+「痛む、患う、病気になる」などがある。これらの例を見る限り、複合動詞を形成する個々の動詞が類義的であることから、その語義的アスペクトもまた元の動詞のそれと同様であると推測される。

【仮説6】複合動詞層のP_V1-V2は、単独動詞層の局面P_V1と同様に、複合動詞自体の語義的アスペクトとP_V1以外の相の局面とによって決まる。

動詞連続層:P_V1+V2

同層に現れる形式は**動詞連続**(serial verb construction/ verb serialization)である。動詞連続V1+V2が枠となり、その間に名詞が挟まれてV1+N+V2として出現する場合もある⁽¹²⁾。動詞連続V1+V2は、前項V1および後項V2の持つ語彙的意味により、「一連の継起的行為」、「手段の行為とその目的」、「原因とその結果」など、さまざまな意味関係を表すが、「時および因果関係の表現」としては、V1が意図的な動作の企図を表し、V2がその結果の成否およびその結果についての話し手の主観的評価(成功、残念など)を表す場合がある。特にV1が他動詞の場合、NはV1の補語で、その意味役割はV1の被動作者であり、かつNはV2の主語である。例えば、日本語の他動詞「割る」に相当する単独の他動詞はタイ語にはなく、「窓を割る」は、*thup4*「V1: 叩く」*naa3=taan1*「N: 窓」*tæek2*「V2: 割れる」のように、「企図される具体的な動作と、その結果としての状態」として表現する。

動詞連続V1+V2は、両動詞の間に名詞Nだけでなく、否定詞*may3*「～しない」を挟むことができる。この点で、動詞の形態素が切り離せない複合動詞(V1-V2)と、分離可能な動詞連続(V1+V2)には大きな違いがある。「V1(NP)(Neg)V2」のように、V1とV2が枠となって、両者の間に補語や否定詞が現れるのは、タイ語だけでなく、隣接するラオス語、クメール語にも共通する特徴である。

時および因果を表す動詞連続の場合、V1に「企図あるいは着手」を表す「する動詞」が現れ、その結果として、V2に「結果状態」を表す「なる動詞」が現れることで、企図の場合は「V1するとV2になる」、着手の場合は「V1したらV2となった」という意味を表す。さらに否定詞

(12) このような形態統語構造上の不連続性は特異なものではなく、よく知られた類似の例として、ドイツ語の枠構造(Satzklammer/ Rahmenbau)の例がある。影山(1993)は、日本語の複合動詞にも「語彙的複合動詞」と「統語的複合動詞」の別があるとする。

may3「～しない」を挟んだ「V1+否定詞+V2」のような場合、企図の場合は「V1してもV2にならない」、着手の場合は「V1したがV2にならなかった」という意味を表す。

【仮説7】動詞連続層の局面P_V1+V2は、V1が「する動詞」、V2が「なる動詞」の場合、P_V1(原因動作)およびP_V2(結果状態)の2つの局面からなる。

補助動詞層:局面P_V1+[V2|v]

同層に現れるのは方向動詞(directive verb)である。方向動詞は、動詞の一部pay1「行く」、maa1「来る」、yuu2「居る」、ɔɔk2「出る」、khaw3「入る」、khun3「上る」、lon1「下りる」、way4「置く」、duu1「見る」など、主に移動や所在の位置を表す動詞類が、本来の具体的空間移動・位置を示す意味から、「時の経過の表現」や「動作の直示的表現」を表す方向動詞として**文法化:grammaticalization**されたものである⁽¹³⁾。動詞連続の後項V2が文法化されて方向動詞となったものを「v」で表すことにする。

Comrie (1976:64-65)は、2つの時点の関係を述べる完了相が「現在から過去へ」という視線の方向性を持つ点で「回顧的:retrospective」であるのに対し、「現在から未来へ」という対称的な視線の方向性をもつ「展望的:prospective」なアスペクトの存在について述べ、例として英語の *to be going to*, *to be about to do* などの迂言的表現を挙げている。タイ語では方向動詞maa1「来る」が、「回顧的な時の経過」の意味を表す。一方、pay1「行く」、way4「置く」、sia5「損なう、壊れる」が「展望的な時の経過」の意味を表す。

【仮説8】補助動詞層の局面P_V1+[V2|v]は、P_V1およびP_[V2|v]の2つの局面からなる。P_[V2|v]は「V1に関する時の経過と直示的意味の追加」を表す。

終助詞層:局面P_F

同層に現れる形式は句末助詞(Phrase Final Particle)の一つ、lɛw4である。Boonyatipark (1983:157-158)はlɛw4の意味の一つとして、以下の分析を提案している。

[...] it is considered that lɛw4 indicates that a crucial amount of some activity has been carried out, a crucial point of a situation has been reached (not necessarily the completion point), i.e., **a change to or arrival at a new situation has come about** at the time of reference [*ibid.* 157-158] [強調は引用者]

(13) 孤立語の「文法化」をどう考えるかは難しい問題である。多くの助動詞や終助詞など、元来機能語であったものを除けば、孤立語の機能語の多くは、内容語が「文法化」されたもので、共時的にも依然として内容語としての意味を持つ。ただし方向動詞の場合、本動詞で補語をとるものであっても、方向動詞の位置では補語をとることが出来ない点で、本動詞と区別可能である。

*lɛw4*が postverbal marker for new situations であるとするのは妥当な分析であると考えられる⁽¹⁴⁾。

一方、*lɛw4*が「完結相:perfective」を意味するという主張としては、Comrie(1976)の定義を踏まえての Iwasaki & Ingkaphirom(2005)がある。なお同論は *lɛw4*の出現環境によって、完了相(perfect)および完結相(perfective)のどちらかの意味になると述べているが、この分析は中国語の「了1」「了2」の分析を援用したもののようなものである。

【仮説9】終助詞層の局面 P_F は未実現の局面(未然相)から実現の局面(已然相)への「局面の新展開の認識」を表す。

*lɛw4*が意味あるいは認知レベルでの「局面の新展開の認識」を示すとする分析の詳細については、峰岸(印刷中)を参照されたい。

5. 日本語のアスペクトの概要

表3は、日本語の「時の表現」に関連する形態統語上のレイヤー(Tp, V, Aux, N)層および各レイヤーに現れる形式類が表す認知・語用論上の時の局面(Phase)を、複層分析記述法によって表したものである。

表3. 日本語の時の表現の複層構造

レイヤー	各形式の相対的出現位置					
主題層 (Tp)	時間詞					
単独動詞層 (V)	V					
複合動詞層 (V1-V2)	V1		-V2			
補助動詞層 (+V2)	V1 +			+ V2		
助動詞層 (Aux)	動詞屈折辞					
体言層 (N)	(準)前接語					
局面 (P)	P_Tp	P_V1	P_-V2	P_+V2	P_Aux	P_N

膠着語の特性としての、動詞語幹に続く各形式の承接によって生じる形態レベルの調整(例:複合動詞形成において、V1-が連用語幹のみになる、補助動詞+V2との承接の際に、V1+が「連用テ形」になる、助動詞「-た」の前でV層の各形式は連用形になるといった形態上の調整ならびに終助詞の位置および意味)など、時の表現に関係しない形式は省略する⁽¹⁵⁾。

(14) Jenny(2001)は明らかに不正確な記述がBoonyatipark(1983)にいくつかあると、具体的に指摘していることに注意されたい。

(15) 動詞を中心とした用言複合体における形式相互の承接関係についての主な研究として、國廣(1982)、水谷他(1983)、風間(1992)、宮岡(2015)および江畑(2022)がある。中でも國廣(1982:6)の図「動詞語尾の屈折体系」は、各形式の承接関係に加え、助動詞(屈折接尾辞)「ru/ta」の屈折上の特別な位置づけを図示している点で先

以下の形式間の境界表示記号のうち、「-」(ハイフン)は接辞の境界を、「=」(等号)は接語的拘束句の内部境界を、「≠」(不等号)は準接語的拘束句の内部境界を示す。詳しくは宮岡(2015)を参照されたい。

日本語の「時の表現」は、表3の各層とその局面ごとに、以下のような特徴がある。

主題層:局面 P_Tp

同層に現れる形式は、タイ語と同様、「時」を特定する名詞類(時間詞)および名詞句であり、タイ語の主題層の仮説2、仮説3が成り立つ。ただし、日本語のP_Tpのスコープは、新たに別の時間的局面を表す形式がTp層あるいはN層に現れるまでである点が、タイ語と異なる点である。

動詞単独層:局面 P_V1

同層に現れる形式は、タイ語と同様、単独で現れる動詞である。タイ語の動詞単独層の仮説5が日本語にも適用される。即ち、日本語の動詞単独層の局面P_V1は、動詞自体の語義的アスペクトと、P_V1以外の相の局面(例えば主題層の時間詞、補助動詞層の+V2)との総和で決まる。

動詞の語彙的アスペクトによる分類には、補助動詞「ている」との共起制限の分析に関する金田一(1950)以来、布村(1977)、奥田(1978)などの修正を経ての長い研究史がある。仮説5は、アスペクト形式との共起関係の分析に際し、「ている」以外の形式も配慮すべきであることを示唆するが、具体的な分析については、稿を改めて論じたい。

複合動詞層:局面 P_V1-V2

同層に現れる形式は**複合動詞**(V1-V2)である。複合動詞の後項V2(用言性2次的接尾辞)の一部はアスペクトの表現を担うとされる。

【仮説10】複合動詞層の局面P_V1-V2は、V1の表す局面P_V1と、V2の局面P_-V2との組み合わせからなる。ここでP_V1は、動詞単独層の局面の場合と同様に、V1動詞の語義的アスペクトであるとする、P_-V2は、「開始、継続、終了」などの不完結相である。

この日本語の複合動詞層についての仮説10は、P_V1の語義的アスペクトとP_V2の不完結相アスペクトの2つの局面を考える点で、タイ語の動詞連続層の仮説7と共通するが、P_V2の意味は、タイ語の助動詞層の局面P_Auxに相当する。ただし日本語では「開始、継続、終了相」までを意味するが、タイ語では「終了相」が含まれない点が異なる。

駆的である。

複合動詞研究は、古くは武部(1953)に遡る。国立国語研究所は、複合動詞約2700語を収めたデータベース「複合動詞レキシコン」を公開している。

姫野(1999:30-31)は、山本(1983)、寺村(1984)、城田(1998)、影山(1993)、野村(1987)の後項動詞の意味分類を、表「主な後項動詞の意味 先行研究の比較」にまとめている⁽¹⁶⁾。同表で山本(1983)がアスペクトと分類するものは以下の15語である。

始発相

「出す、始める、かける、かかる」の4語

継続相

「続ける、続く」の2語

習慣相

「つける」の1語

終了相

「上げる、上がる、終わる、終える、やむ」の5語

完遂相

「切る、抜く、通す」の3語

このうち習慣相は特定の「時」の表現とは無関係であるため、除外する。習慣相以外は不完結相(imperfective)である。一見、始発相(4語)と終了相(5語)の数は拮抗しているが、完遂相(3語)は終了相の意味に出来事についての話し手の肯定的な主観表現を加えたものと考え、複合動詞の後項の意味の重点は、「出来事の終わり方とその主観的評価」に傾いていると考えられる。

【仮説11】複合動詞層の後項動詞の局面P_V2が表す不完結相(imperfective)は、単なる「終了相」だけでなく、話し手の出来事の首尾に関する主観的評価、「完遂、成功、成就、失敗」などの多様な意味を表す。

仮説11は、日本語の複合動詞の局面P_V2が、開始・進行の局面としては「開始、将然」および「進行、継続」といった客観的評価しか表さないのに対し、終了の局面としては「終了、完遂」に多様なモダリティー的表現が加わることを述べている。認識論的には、「出来事は常に回顧的である」と言えるかもしれない。主観的出来事がいつ始まったかというのは、実は多くの出来事について自明のことではなく、「後知恵」でもって「あの時が出来事の始まりであった」と気づかれると同時に、その出来事に関する主観的評価も示されるのではないだろうか⁽¹⁷⁾。これは、言語学的というより、出来事の意味づけが「後づけの解釈」として行われるという、人間の認識のあり方に関する仮説である。

(16) 姫野の比較表で「国研(87)」と記されているのは、野村(1987)『複合動詞資料』である。なお、同書は国立国語研の刊行物ではなく、科研費(課題番号61120014)の研究成果報告書である。同資料集の収録語彙が総計7432語と突出して多いのは、漢字・仮名遣いの包摂をせずに、見かけの異なり数を数えているためである。

(17) 例えば、「日本における武士政権の成立」といった歴史上の出来事の開始の時点が歴史学の進展によって書き換えられるのは、必ずしも新資料の発見だけによるのではなく、「武士政権」そのものの定義が修正され、それによって何をもって政権が成立したかの見方もまた変わるためである。このように、出来事の開始は「外力が加わることで物体の位置が移動する」といった客観的事象の開始とは、質的に異なる。

補助動詞層:局面P₊V2

同層に現れる形式はアスペクト補助動詞などの準前接語である。例:「≠いく、≠くる、≠いる、≠ある、≠みる、≠おく」など。補助動詞に先行する動詞をV1とすると、「≠いく」(V1以降の時間経過の展望的表現)、「≠くる」(V1以降の時間経過の回顧的表現)、「≠いる」(V1以降の期間の(一時的)継続)、「≠ある」(V1以降の時間経過)、「≠みる」(V1の後の結果への注目)、「≠おく」(V1以降の局面変化への展望・予測)は、「時の経過を直示的に表す」という共通点が認められる。

補助動詞には、「時」の表現だけでなく、「≠あげる、≠やる、≠くれる、≠もらう」(授受表現)や、「≠いらっしゃる、≠いただく」(待遇表現)、「≠ほしい」(願望)、さらには前接辞「-たい」と複合した、「≠あげたい、≠やりたい、≠もらいたい、≠いただきたい」といった多様なものがある。これらの表現を総括すると、叙述内容の中核部分(動作・出来事とその参加者)を表す動詞および複合動詞を、屈折接尾辞「-て」を用いて統語的に拡張することによって、「時の経過」「出来事の結果」「授受に関する第三者の関与」「出来事に関する話し手の評価・態度」(いわゆるモダリティ)を表す表現であると考えられよう。

【仮説12】補助動詞層の局面P₊V2は、先行する前項動詞の局面P₋V1+と補助動詞局面P₊V2との組み合わせからなり、「時の経過」、さらには「出来事の主観的評価」にまで関わる。

助動詞層:局面P₋Aux

同層に現れる助動詞は、動詞の屈折接尾辞「-る、-た(-だ)」である。屈折接尾辞は、動詞の中核部分(動詞V、複合動詞V1-V2)および拡張部分(補助動詞+V2)を、形態上の一つのカタチとしてまとめる機能を持っている。

「-た」がテンスを表すのか、アスペクトあるいはムードその他の意味を表すのかについては、従来さまざまな議論が対立している。「-た」は過去時制を表す、あるいは文脈によって過去または完了を表すという主張が工藤(1995)を始めとして多数である一方、日本語にテンスはないとする主張として、山田(1908)、国広(1967)、Martin(1975)、森田(2007)などがある⁽¹⁸⁾。本稿では、以下の仮説を設定する。

【仮説13】助動詞層の局面P₋Auxの「-た」は、未然相から已然相への「局面の新展開の認識」であり、「-る」は、有標項「-た」と対立する以外に積極的な意味を持たない無標項である。

この仮説は、タイ語の分析を踏まえての暫定的なものである。なお、「未然相から已然相

(18) Martin(1975)は日本語の参照文法であるが、tenseを認めず、-taをperfectiveではなく、perfectとしている。テンスを持つ英語の母語話者による日本語の分析・記述である点で、再考すべき余地があると考えられる。

への局面の新展開」は、Comrie(1976)の不完結相の枠には収まらないことを指摘しておく。第2節で見たように、不完結相は状況を内部から見た「開始、進行、終了」のいずれか一部に着目する。言い換えれば、不完結相としての「開始」は、意味的には「終了」と対立する。一方、「局面の新展開」という観点は、「未然相:まだ始まっていない局面」と「已然相:既に始まった局面」との対立に注目して、「始まるか、始まらないか」を問題にしているが、始まった後の終わり方の局面にまでは関心を持たないのである。こう考えると、いわゆる「発見、回想、確述、ムード」の「-た」は、決して例外的な意味をもつのではなく、むしろ本質的な意義を表していると考えべきである。この問題については、先行研究をさらに吟味した上で、詳細な検討を加えるべきであるため、稿を改めて論じることとする。

体言層:局面P_N

同層に現れる形式は、体言(名詞)、形式名詞、体言化準前接語、体言性前接語である。これらを「体言類:nominals」と呼ぶことにする。体言類は、名詞(内容語)としての意味内容が具体的か、あるいは文法化の結果として希薄かという基準によって分類が可能である。体言類に共通する統語的機能は、体言修飾語、句、節が修飾する対象として「形式的支え:prop」となることである⁽¹⁹⁾。

体言類としては、次に挙げるような様々な形式が同層に現れるが、分類とその基準についてはなお検討を要する。

名詞および名詞句:「昨今、この一年、近年、毎日」など。これらは具体的な意味内容を持つため、主題の時間詞としても用いられる。

形式名詞類:「=最中」など。これらは概念内容が希薄化しているため、「その最中に」のような迂言的名詞句でないと、そのままでは主題の時間詞にはなれない。

体言化準前接語:「≠ところ」。これも概念内容が希薄化し、単に「時間、局面」を漠然と意味する。主題の時間詞にはなれないが、「ところ=が」の形で文頭の接続詞になる点で、下記の体言性前接語とは異なる。

体言性前接語:「=の、=ばかり」など。これらは明確な概念的意味を持たない。体言修飾句が修飾する「形式的支え」としての機能を持つ。

形態統語上は、V各層から助動詞層までに現れる各形式は、連体修飾句・節を形成し、従属部として後続する主要部である体言類を修飾する。一方意味上は、叙述内容を具体的に表現しているのは従属部の連体修飾句・節の方であり、主要部の体言類はほとんど概念的内容を持たない。言い換えれば、これら無内容の体言類は、用言化前接語「=だ、=です、=

(19) 体言類の形式の分類は宮岡(2015:188-189)に従う。準前節語と前接語(clitic)を明確に区別するのは困難である。このため、本稿では名詞性(概念内容)の具体性、希薄性の判断基準として、主題化できるか、接続詞化できるかによって区別しようと試みた。「形式的支え:prop」もまた、宮岡(2015)の提示する概念である。

である」を後続させるための「形式的支え:prop」になるという、統語上の機能をもっぱら果たしている。これは、統語的な主要部(被修飾語としての体言)と意味的な中核部(用言複合体による連体修飾部)とが必ずしも一致しないという事実の一例である⁽²⁰⁾。

以上のように、体言層の体言類は、これに先行する修飾部を承けて、「時の一局面」という概念を意味する体言としてまとめ、さらに用言化前接語が後続することを可能にすることで、用言性述語を体言性述語文へと転換していると考えられる。これは、日本語の連体修飾の修飾部と被修飾部の共起に関する意味の制約が緩いことによるものである。「=のだ」文、「人魚構文」などの体言性述語文が存在するのも、この修飾部と被修飾部との結合の緩さという性質によるものである。

【仮説14】体言層の局面P_Nは、それに先行する用言類の叙述内容を一つのまとまった局面として概念化し、体言化する。こうして体言化された句には、用言化前接語が後続することで、体言性述語文となる。

仮説14によって形成された体言性述語の記述は省略する。

6. タイ語と日本語のアスペクトの対照

表4は、時の局面の意味について、タイ語と日本語それぞれのどの層が対応するかを示したものである。ただし、太字で示したタイ語の「複合動詞」および日本語の「助動詞」の位置づけは暫定的なものである。

表4. タイ語と日本語の層と局面の対照

局面の意味	タイ語レイヤー	日本語レイヤー
時間場面の設定	主題層 (時間詞)	主題層 (時間詞)
未然、将然、近接	助動詞層 (連用詞)	複合動詞層 (複合動詞の後項動詞)
開始、進行		
終了	動詞連続層 (動詞連続の後項動詞)	
語義的アスペクト	単独動詞層 (動詞)	単独動詞層 (動詞)
	複合動詞層 (複合動詞)	
時の経過・直示表現	補助動詞層 (方向動詞)	補助動詞層 (補助動詞)
局面の新展開の認識	終助詞層 (終助詞)	助動詞層 (助動詞)
局面の概念化		体言層 (体言・前接辞)

表4の出来事の開始から終了までの局面の展開のうち(終了相を表すレイヤーの違いは

(20) SVO型のタイ語の動詞連続構造において、後項動詞V2が否定でき、前項V1より後項V2の叙述に情報構造上の焦点があることも、統語構造上の主要部と意味・語用論上の中核部が異なる、もう一つの事例である。

あるが)、先行する「始まり方」の局面は、タイ語では動詞(V)に先行する連用詞が表し、日本語では複合動詞の後項(-V2)が表す。一方、後続する「終わり方」の局面は、タイ語では動詞連続の後項(+V2)が表し、日本語では複合動詞の後項(-V2)が表す。表5は、出来事の時間的局面的推移を横軸にとって明確化したものである。

表5. タイ語と日本語の局面的時系列的变化の対照

タイ語	P_Tp	P_Aux	V	P_+V2	P_v	P_F
局面的意味	時間の設定	開始、進行	(動詞)	終了・ 結果状態	時の経過	局面的新展開
日本語	P_Tp	V	P_-V2	P_+V2		P_F
局面的意味	時間の設定	(動詞)	開始、進行、 終了	時の経過	局面的新展開	概念化

表5から動詞を除外して考えると、タイ語でも日本語でも、不完結相では、「開始、進行、終了」に続いて、「時の経過」が、さらには「局面的新展開」が続くことが判る。これは、「出来事における時の進行」と、両言語の「表現の局面的推移」とに並行性があり、前者と後者の間に類像性(iconicity)があることを示している。

上記の他にも、言語の時の表現の共通点と相違点として以下のようなものが挙げられる。

【全体としての共通点】

1. 類型特徴である「主題卓立性」により、文頭の主題が時間場面を設定する。
2. 「時の経過」の表現を、空間表現から時間表現へと文法化した動詞類が表す。タイ語では方向動詞の一部が、日本語では補助動詞の一部が「時の経過」を表すが、両者の形式は、回顧的な「タイ語 *maa1* (来る)、日本語: くる」、展望的な「タイ語 *pay1* (行く)、日本語: いく」、継続的な「タイ語 *yuu2* (居る)、日本語: いる」のように、文法化する前の動詞の意味まで一致する。回顧的・展望的な時の経過が、動詞に後続する補助動詞層という、叙述の形式的な拡張部分に現れる点も、両言語の共通点であり、「時の表現の類像性」のひとつである。
3. 「局面的新展開の認識」を表すタイ語の終助詞と、日本語の助動詞は、ともに動詞述語の最後に出現するという共通点を持つ。これもまた、品詞性を越えた「時の表現の類像性」のひとつである。

【全体としての相違点】

1. 両言語の最大の違いは、タイ語の出来事の叙述とその形態統語的な拡張の方法が、あくまでも動詞性述語として展開される“verby”な性質を持つものに対して、日本語では用言性述語を体言性述語へと転換する体言層が存在することである。このことは、前者がSVO基本語順の孤立語であり、後者がSOV語順の膠着語であることに起因すると

考えられる。

2. SVO型のタイ語とSOV型の日本語では、当然ながら助動詞の位置と時の表現に関する意味が異なる。

7. まとめと考察

本稿では層と局面に着目する新しい記述分析法として、機能主義的な観点に基づいた「複層分析記述法」を提案し、その方法論の有効性を検証するために、SVO語順の孤立語であるタイ語と、SOV語順の膠着語である日本語という、形態類型上も基本語順も対称的に異なる言語について、「時の表現」についての比較対照を試みた。その結果として、複層分析記述法には次のような長所があることが明らかになった。

第一に、複層分析記述法は対照研究における通言語的、中立的な記述法として有効である。言語類型論に基づいて通言語的対照研究を行うべきであるという主張は、一見妥当なものに見えるが、英語などの西洋語の観点から作られた言語類型論が、「あるべき形態上の特徴」をもたない孤立語を適切に扱うことができないことは、Dryer *et al.* (2013) のWALSデータベースを見れば明らかである。同様に、日本語の文法体系からみたX語との対照研究もまた、かつて *de facto* の標準であったラテン語、現在の英語基準を日本語基準に置き換えただけではないか。この点、複層分析記述法は、言語形式と意味内容を機能主義の観点から抽象化した「層と局面」による記述分析法であり、層および局面の分割を、個別言語の形態統語論的な記述からボトムアップで積み上げる点においても言語中立的であるという長所を持っている。

第二に、複層分析記述法によって、発話の叙述内容を、音韻、形態、動詞、体言を中心とした形態統語レベルの層に分けることで、各層に現れる形式の出現順および意味機能を分析して表現することが可能になる。その結果、従来「文脈」と大きくひとくりにされてきた情報内容を、各層の形式の前後関係という、「ミクロの文脈」として明確化し、比較対照することができる。

第三に、出来事を複数の局面に分割することで、「開始、進行、終了」といった客観世界で進行する事象を、複数の局面の対比あるいは推移という主観的な出来事に対応させて表現することができる。その結果、タイ語と日本語の対照においては、「時の表現」における出来事の局面の推移と時の表現との並行性という類像性が見いだされ、両言語間の種類の違いを超えた共通性を明らかにすることができた。

今後の課題としては、既に触れたように、次のようなものがある。

第一に、本稿で挙げた14の仮説については、先行研究の結果の吟味と近年の研究成果を踏まえての検証が必要である。これは今後の検討課題である。

第二に、タイ語の複層分析記述法による表2では、「V1+V2」という2つの動詞からなる典型的な例を挙げたが、V1およびV2は、単一の動詞とは限らない。少なくともV1には、*haa5*「探す」+ *suu4*「買う」=「買い求める」のように、複数の動詞(ただし両語とも「する動詞」)

からなる例があるため、より正確にはV1類(「する動詞」類)、V2類(「なる動詞」類)のようにすべきかもしれない。動詞連続の詳細な分析もまた、今後の課題である。

第三に、タイ語の *leew4* についての「未然相から已然相への局面の新展開の認識を表す」という分析を、そのまま日本語に適用可能かどうかは、大きな検討課題である。本文で触れたように、日本語に文法範疇としてのテンスがあるかどうかについては、古くは山田(1908)に見られるように、断続的ではあるが長期にわたっての意見の対立がある。一般に、「～がない」という命題の論証は論理的に不可能であるため、テンスがないという説は不利な状況に置かれている。このような場合、さまざまな言語事象について、テンスがあると仮定して議論するよりも、テンスがないと仮定して議論する方が、より例外が少なく、一貫した合理的説明ができることを示す必要がある。

本稿は、孤立語と膠着語とを比較する際に、複層分析記述法を適用することで、その対照研究における有効性を検証した。複層分析記述法は発展途上のアイデアであり、今後、同様の検証を東南アジア大陸部の孤立語であるラオス語、クメール語、ベトナム語について、さらには中国語について行い、分析記述法の修正・改善を図ることで、東アジアから東南アジアにかけての対照研究が進展することを期待したい。

峰岸 真琴(みねぎしまこと、MINEGISHI Makoto)
東京外国語大学名誉教授

参考文献

- Boonyapatipark, Tasanalay 1983. *A Study of Aspect in Thai*. PhD Thesis, School of Oriental and African Studies, University of London.
- Comrie, Bernard 1976. *Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems*. Cambridge University Press. (山田小枝訳1988.『アスペクト』, むぎ書房.)
- 江畑冬生 2022. 「言語類型論から見た日本語の動詞形態法と統語的派生」, 『言語の普遍性と個別性』第13号 pp. 23-50.
- 姫野昌子 1999. 『複合動詞の構造と意味用法』, ひつじ書房.
- 廣瀬幸生・島田雅晴・和田尚明・長野明子(編) 2022. 『比較・対照言語研究の新たな展開—三層モデルによる広がりや深まり—』, 開拓社.
- Iwasaki, Shoichi & Preeya Ingkaphirom 2005. *A Reference Grammar of Thai*. Cambridge University Press.
- Jenny, Mathias 2001. The aspect system of Thai. Karen H. Ebert & Fernando Zúñiga (eds.) *Aktionsart and Aspecto-temporality in non-European languages: proceedings from a workshop held at the University of Zurich, June 23-25, 2000, Nr. 16*. pp. 97-140, Zürich: Universität Zürich.

- 影山太郎1993.『文法と語形成』, ひつじ書房.
- 加藤重弘 2006.「線条性の再検討」, 峰岸真琴(編)『言語基礎論の構築に向けて』, pp.1-25. アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 風間伸次郎1992.「接尾型言語の動詞複合体について」, 宮岡伯人(編)『北の言語:類型と歴史』pp.241-260. 三省堂.
- 金田一春彦 1950.「国語動詞の一分類」, 『言語研究』, 15, pp.48-63.
- 国広哲弥1967.『構造的意味論—日英両語対照研究—』, 三省堂.
- 國廣哲彌1982.「日本語・英語」, 森岡健二、宮地裕、寺村秀夫、川端善明(編)『講座日本語学 11 外国語との対照Ⅱ』, pp.2-18. 明治書院.
- Long, Seam (n.d. 2000?) *Dictionnaire du Khmer Ancien (D'après les inscriptions du Cambodge du VIe.-VIIIe. siècles)*. Phnom Penh Printing House.
- Martin, Samuel E. 1975. *A Reference Grammar of Japanese*. Yale University Press.
- 峰岸真琴1986.「クメール語の動詞連続における /baan/ の意味について」, 『東京大学言語学論集'86』 pp.45-57. 東京大学文学部.
- 峰岸真琴2007.「孤立語の他動詞性と随意性:タイ語を例に」角田三枝, 佐々木冠, 塩谷亨編『他動性の通言語的研究』, pp.205-216. くろしお出版.
- 峰岸真琴2019a.「タイ語の数量表現」, 『言語の類型特徴対照研究会論集』第1号, pp.115-132. 日中言語文化研究社.
- 峰岸真琴 2019b.「タイ語の情報構造に関わる諸表現」, 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』50号, pp.189-204.
- 峰岸真琴 2019c.「タイ語のとりたて」, 野田尚史(編)『日本語と世界の言語のとりたて表現』, pp.129-144, くろしお出版.
- 峰岸真琴 (印刷中).「タイ語の時と出来事の表現」, 『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』, 54号.
- 峰岸真琴、ウィッタヤーパンヤーノン・スニサー2019.「タイ語の主題とその談話での現れ方について」, 『言語の類型特徴対照研究会論集』, 第2号. pp.111-135. 日中言語文化研究社.
- 宮岡伯人2015.『語とはなにか・再考—日本語文法と「文字の陥穽」—』三省堂.
- 水谷静夫、石綿敏雄、荻野孝野、賀来直子、草薙裕1983.『朝倉日本語新講座3 文法と意味Ⅰ』朝倉書店.
- 森田良行 2007.『助詞・助動詞の辞典』, 東京堂出版.
- 中沢英彦 1980.「[Book review] Bernard Comrie, Aspect: An Introduction to the Study of Verbal Aspect and Related Problems, Cambridge, 1976. 142pp」『東京外国語大学論集』, 第30号, pp.307-313.
- 野村雅昭1987.『複合動詞資料集』文部省科学研究費補助金 特定研究(1)研究課題名「言語データの収集と処理の研究」(研究課題番号61120014).

- Noss, Richard 1964. *Thai Reference Grammar*. Washington: Foreign Service Institute, Department of State, United States Government.
- 布村政雄(奥田靖雄)1977.「アスペクトの研究をめぐって—金田一的段階—」『宮城教育大学国語国文』8, pp.51-63.
- 奥田靖雄1978.「アスペクトの研究をめぐって」『教育国語』53号 pp.33-44, 54号, pp.14-27. 麦書房.
- Phillips, Audra & Prang Thiengburanatham 2007. Verb classes in Thai. *Language and Linguistics* 8.1:167-191.
- 坂本恭章 1988.『カンボジア語辞典』 大学書林.
- 城田俊 1998.『日本語形態論』, ひつじ書房.
- 武部良明 1953.「複合動詞における補助動詞的要素に就いて」, 金田一博士古稀記念論文集刊行会(編)『言語民族論叢 金田一博士古稀記念』, pp.461-476, 三省堂.
- Talmy, Leonard 1991. Path to Realization: A Typology of Event Conflation, *Proceedings of the Seventeenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society: General Session and Parasession on The Grammar of Event Structure* (1991), pp. 480-519.
- 寺村秀夫 1984.『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版.
- 山田孝雄1908.『日本文法論』宝文館. [同復刻版1970]
- 山本清隆 1983.「複合語の構造とシンタクス」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究5』, 情報処理振興事業協会.
- データベース(最終アクセス年月日:2023年1月30日)
- Dryer, Matthew S. & Haspelmath, Martin 2013. *The World Atlas of Language Structures Online* (<https://wals.info/>)
- 国立国語研究所『複合動詞レキシコン』(<https://vvlexicon.ninjal.ac.jp/>)

